

# Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: Village Vanguard in 2008)

## 《「L」さん》

以前「Vol.10」のこのコーナーで紹介した「ハニー」とは全く別の人物だが、今回は「L」さんの話。「L」とは、度々このコーナーで登場している自分がウェ이터をしていたレストランにやって来る常連さんだった黒人の女性の名前。余談ながら、ブルー・ハーツの名曲のタイトルでその名を2回繰り返していたりもするが、念の為にインシャルで書きます。

「L」の姿を見かけられるようになったのはウェ이터2年目の頃だっただろう…。店はタイムズ・スクエア付近の劇場街にあったため、劇場のオープン時間前後を含めて観光客もたくさん訪れたが、ニューヨークでは老舗レストランだったので常連客も多く、テーブル席につくお客さんの7-8割は外国人だった。

常連さんの中でも特に外国人のお客さんは毎回決まったメニューを注文する人も多く、礼儀正しくいつもニコニコと微笑みながら佇んでいる人もいれば、毎回本を読んで静かに待っている人、ずっと喋り通している白人の女性客やぶっきらぼうな感じの人もいるなど、個性的な人が多かった。勿論、こちらの対応次第でお客さんの表情も変わるわけで、「お客様は神様です」とはよく言ったものだと思う。また、それぞれ好みのテーブルがあって、劇場の通りが眺められる窓側が好みの人もいれば、店内の奥にあるテーブル(店では「Bセクション」と呼んでいた)が好みの人もいるなど、毎回ほぼ座席も決まっていた。

そんな中、それぞれウェ이터&ウェイトス仲間の間で接客しづらいお客さんも稀にいたりして、その日によって担当のセクション(Aセクション、Bセクション、寿司バー、座敷など)が決められていたものの、余程苦手なお客さんが自分の担当セクションに座ってしまった場合などは、ケースバイケースで一時的に接客を変わってもらうこともあった。

「L」が店に顔を出し始めたウェ이터2年目の頃は、自分もまだオーダーミスも目立ち、先輩のウェ이터&ウェイトレスもいた時代…。「L」が店にやって来るのは決まってディナーの時間帯、19時半前後だった。D派手でピチピチのセクシーな洋服に身を纏い、黒人特有の匂いの強い香水をブンブンと匂わせ、冬は毛皮のコートなどを羽織い、夏は短めのスカートに結構な迫力ボディ&胸の谷間などを見せ付けながら、店のドアを開けるとお好みのBセクションの2人がけのテーブルに無言で直進。最初の頃は終始無愛想な感じで微笑むこともなく、オーダーを取る時にも「Ha?」「Aha」などメニュー以外は一言二言こぼを投げかける程度で、当時はタバコもふかしていた記憶もあり、正直ウェ이터&ウェイトレス仲間の間でも評判は良くなかった…。

そして、ある晩…自分に上撃命令が下った。だが、ウェ이터&ウェイトレス仲間の評判に反して、自分はそれほど「L」に対して悪い印象は持っていなく、ジャズを志していたせいもあって黒人の人たちには寧ろ好感を抱いていた。当時「L」は30代半ばくらいだったのだろうか…ビヨンセなどは異質だったが、無愛想ながらも時折見せる笑顔が愛くるしい黒人女性という印象を持っていた。だが、最初は自分も他のウェ이터&ウェイトレス同様に無愛想に対応され、オーダーする際自分を呼ぶ時にも無言で指の合図で召使いのように呼ばれもしたが、徐々に「L」が興味深げに見入っていた日本人客用に日本語で書かれたメニューを怪しげな英語で説明してあげたり、お通しのおかわりをせがまれると「OK!」と合図してそっと差し出すなどしているうちに、「L」も心を開いてきたのだろう…店に入るとすぐさま自分を見つけ「Hi, Masa!」と声をかけてくれるようになり、笑顔で会話を交わすようになった。そして、そのうちに大きな体格を誇る黒人の彼氏を伴って2人で店に来るようになった。「L」の紹介でR&Bなど音楽のプロデュースを行っているというその彼とも親しくなり、2人共毎回店に来るなり「Masa!」と親しみを込めて呼んでくれた。その頃には「L」からも以前のような無愛想な表情が消えて、2人一緒に週に1~2日は必ずやって来るほど、すっかり店の常連さんになった。

また、そんな2人に感動させられたことがあった…。以前「Vol.4」と「Vol.5」で『NY救急車 Vol.1 & Vol.2』と題してこのコーナーで書いたが、自然気胸という症状でニューヨークの病院で入院を余儀なくされた時のこと。入院の前後、ウェ이터の仕事は計2ヶ月近く休まざるを得なくなり、突然のことだったので「L」たちにも自分が暫く休むことなど伝えることも出来なかった。そして、入院後ウェ이터&ウェイトレス仲間がお見舞いに来てくれた時にひとつの封筒を渡された。中にはCDが一枚と手紙が同封されていた。CDはRachelle Ferrellという女性ヴォーカリストの『First Instrument』というアルバムだった。そして、手紙には「Hi, Masa! We miss you so much! ...」と温かいメッセージが綴られていて、手紙の最後に「L」と彼の名前が書かれてあった。

日本に帰国後、暫くの間は「L」たちと手紙やメールで連絡を取り合っていたが、ここ数年はすっかりご無沙汰になっていた。そんな折、今年の年明け早々久しぶりに「L」の彼からメールで連絡をもらった。だが、そこには「L」に関するものは一切書かれていなかった…。当時から約15年の月日が経ち、その後2人がどうなったのか定かではない…。若い頃のとあるレストランでの何気ない日常に過ぎないが、あの頃に出会った人たちの笑顔は今でも心の中に焼き付いている。